

でんでん通信 第百二十九号 平成二十九年七月

坐禅会

今月は、七月二十九日(土) 午前十時より坐禅会を行います。みなさんのご参加をお待ちしております。

夏予定

七月三十日(日) 八時 境内清掃

七月中旬よりお盆まいり

八月二十三日(水) 十時 施餓鬼供養会

安心

もうすぐ早いもので、お盆を迎える時期となつてまいりました。お盆とは「先祖さまをお迎えし、心の安らぎを得る年中行事です。おかげさまで、と仏さま、ご先祖さまに、感謝あるいは「報告し、ご供養を行うおまいりです。この安らぎを得ることこそ宗教の求めるところです。

私ども臨済宗には各地のお寺に法話をして回られます布教師さまがおみえになられます。この布教師さまが、臨済宗・黄檗宗のホームページに「安心」として寄稿されていきましたので紹介させていただきます。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
安心とは一般に、心が落ち着き心配のないことをいいます。仏教では、信仰や実践により到達する心の安らぎ、或いは不動の境地を意味します。

元は阿弥陀仏の救いを信じて往生を願う心の意味で用いられたものでした。

「うやむや」という言葉があります。ぼんやりして

いてはつきりしない様子をあらわす言葉です。

私たちはとかくすべての物事に対して明確にしようとする傾向があります。それは「わからない」ものに対する不安があり、それを払拭するために、無理矢理すべてを明確にしまっているのです。しかし、世の中には、はつきりと決めつけることのできないものが沢山あります。いや、わかつたつもりでいるだけで、ほとんどのことをわかつていないのかも知れませんが、その一つに私たちが亡くなった後、どうなるのか、どこへ行くのか、そんなことはいくら考えてもわかることはないでしょう。

そこで、私たちが死んだ後、「必ず死後の世界が存在する」と決めつける考え方と、「亡くなれば全てが終わる。死後の世界なんて存在しない」と決めつける考え方、このような「どちらか偏った考え方、見方をしているはいけませんよ」と仏教では説かれているのです。そのような偏見から迷いや不安が生じ、人との争いも生まれてくるのです。わからないものはわからないで良いのです。有るとか無いとかに囚われてはいけません。

これを「有耶無耶(うやむや)」というのです。京都清水寺の貫主としてお勤めになっておられた大西良慶和上さんという方がいらつしやいました。

ある日、その和上さんのところに、大学の先生がこんな質問をしに来られました。

「貫主さん、極楽って本当にあるんですか。」
すると和上さんは、

「それはなあ、例えば小僧が『お風呂沸きました』と
言うて来たとき、わしはその言葉を信じて寒い風呂に
いくのや。裸になって、戸を開けて、突っ込むまで、

その湯が熱いんか、ぬるいんか、わからんわけや。そやけど『沸きました』という言葉信じんことには、わしは寒いところで裸になれんやないか。そやから法然さんや親鸞さんが『南無阿弥陀仏と唱えたら必ず極楽に往生する』と言えは、それを信じんとあかんのや。極楽があるとかないとかと言う世界と違う」。

とこう答えられたというのです。
あるとかないとかを考え、決めつけるのではなく、「信」を得ることが大切なのです。信じて止まない心を養うのです。

猫を見て「あれは猫だと信じている」とは言いません。知っているものには「信」を使わないのです。また、「明日は晴れる」と知っている」とは言いません。いくら天気予報で晴れと言われていても、その日にならなければわからないのです。しかし、わからないだけではそこに不安が生じます。その不安を乗り越える力が「信」なのです。明日は晴れると信じている。ただそう受け止めるだけで大いなる「安心」を得ることができるとは、
信じて迷わず疑わず、教えの通りに仏道を歩めば良いのです。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
私の教えを信じ、自らの心を信じ、信の心を養いながら、私たちも日々の生活の中で、「安心」を得てゆるぎない心、確固たる心を得ていきたいものであります。
南禅寺派布教師 平尾宗信師

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
無宗教といわれる現代人。いろいろな事件を耳にするたびに信仰心がないことも一因なのではないかと思ふ昨今です。